

(5) 特別養護老人ホームにおける看取り教育の必要性について
川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 ○勝村 康平

【要旨】

筆者は、特別養護老人ホームの勤務経験の中で、「死」に関心を持つとともに、入居者や家族の望む「良い死」とは何か、ということに関心を持った。考察を深めるなかで、「死」を忌避する社会から、「死」を自然なものとして認めた上で、「QOL」を保障するという方向に移って行っているのではないかという点、医療費削減という医療政策に対して、「最後まで治療を受けて、根治を目指したい」という患者の希望もあるのではないかという点、患者一人の生を支えるのではなく、家族をケアの対象として含み、遺族が死別の悲嘆を乗り越えられるよう支援（グリーフケア）をおこなう必要があること、特別養護老人ホームなど福祉施設での死が増加すると推測される中で、アルフォンス・デーケンの提唱する「死への準備教育」を介護職員などの医療職員以外の職員に対しても広く行っていく必要があるのではないか、という点について問題意識を持った。

特養において、質の高い看取りをおこなうための要件として、「介護職員が入居者の死と向き合うための死生観の構築」、多職種の連携とともに、状態の把握や、痰の吸引、急変時の対応などを専門職として行う能力の育成がなされ、指針の作成などの体制があること、入居者の死後にグリーフケアをおこなうことの3点が重要であり、これらを踏まえた教育が行われるべきであると考える。

本研究では、まず、現代社会において、「死」がどのように位置づけられているか、死をめぐる議論の背景を整理し、考察を加える。次に、終末期の療養場所として自宅、病院、ホスピス・緩和ケア病棟、特別養護老人ホームの特徴を整理し、それぞれの意義と課題を述べる。そして、特養での看取り教育について「死生観の構築」、「体制の構築」、「グリーフケア」の実施という3点から述べ、考察を行う。以上を踏まえて全体的な考察を行い、特養における看取り教育の必要性を明らかにする。